

日本キリスト教団

京都教区ニュース

〒602-0917
 京都市上京区一条通
 室町西入ル
 TEL (075) 451-3556
 FAX (075) 451-0630
 E-mail
 info@uccj-kyoto.com
 発行代表者 望月修治
 編集責任者 韓守信

【巻頭シリーズ】

教区にとって私とは(2)

同志社教会 望月修治

八月十日から十一日まで、教区三役で両丹地区と滋賀地区の九教会・伝道所をお訪ねしました。日本の習慣ではお盆に入り夏期休暇の時期でしたが、各教会で教師、また幾つかの教会では役員の方も交えてお話を聞きすることができました。それぞれの教会での滞在時間が長くなって、次の教会への訪問予定がだんだんとずれ込んで、長い時間をお待ちいただくことにもなっていました。それでも快く私たちを迎えて下さいました。そして、それぞれの教会の状況や課題について語って下さいました。教会員の高齢化、会員の減少、教師の不在(無教師状態)の恒常化によって教会の礼拝や集会が定例的に行えないこと、会堂の老朽化など、こうした現状と課題に対して、このままでは教会の活動を継続して行くことが難しくなっていくことも予想しうる状況であるという現状認識をお

聞きした教会もあります。専任教師が不在のまま会員が減少し、教会活動が実質休止状態になっている教会で、毎週ではなくても定期的に礼拝を守りたいとの希望があります。あるいは付属施設のスタッフを交えた聖書集会も、担当者が与えられれば行いたいとの思いを持っているということもお聞きました。対応をどう展望しうるか、そのことを探って行かなければならないと思っています。この課題は個々の教会で、という枠を超えて検討していかないと展望が十分に開けない課題です。

そのような取り組みの一つの具体例は、滋賀地区が取り組んだ「プロジェクトN」です。今回の訪問で最後にお訪ねした近江野田教会でこのプロジェクトについて、改めてお聞きすることができました。滋賀地区では近江野田教会からの要請を受けて、同教会の今後のあり方について検討、提言する作業チームを組織し、四つのプランを答申しました。この「プロジェクトN」は会員が数名まで減少し、将来の展望が見いだせず閉塞状況にあった近江野田教会にとって大きな転機となりました。老朽化した建物の撤去と整地、トイレの改修

などハード面での整備が地区との協力の中で進められました。そして創立一〇〇年を迎える二〇一〇年に向けて、「プロジェクトN」による答申を踏まえながら、今後の方向性を定めて行こうとしておられます。

また、南山城伝道協議会では巡回教師制度をつくり、地区内での集会や礼拝などの支援、応援を行う体制がとられています。両丹地区では地区独自の教会支援と互助伝道献金制度を設けて、地区内の教会への支援が実施されています。

京都教区の状況は、個々の教会の課題に関して必要とされている支援や展望を、このような協働の仕組みというネットワークを作って担い合うことを必要としていると思っています。「教区にとって私とは」というテーマは、教区や地区で担われている課題、あるいは各教会・伝道所の取り組みや課題について、自分の立ち位置を、どこに置くかということをお問うのだと思います。あの人が取り組んでいる課題、この委員会が担っている課題ということではなく、自分はどう関わるのか、自分の課題として関わりようとしているのかという当事者性が私に求められています。今、教区や地区そして教会が取り組んでいる課題はそれぞれに固有性をもっていますが、いずれも人間が様々な違いをもつて、それを認め合っ

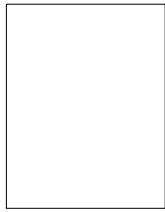
て一緒に歩むことを求めるキリストの福音に立って生きるという委託に応えるということだと思います。その意味で、いずれも福音に生きようと願う「私の立ち位置」に深く関わる事柄なのだと思っております。

「当事者性」ということは、今年五月に開催された京都教区総会でも、「京都教区宣教基本方策の改訂」をめぐる議事の中でも問いかけられました。また八月に京都教区部落解放夏期研修会が開催されました。三〇回目を迎えて、これまでの三十年を振り返り、また今後の十年を展望して行われたシンポジウムを通して「この課題にとって私とは」ということを受け取り直す思いをもちました。「どこにいるのか」（創世記三章九節）という問かけを受けとめた関わりをする、そのことを丁寧にしていこうと思っています。

★★★★★★★★

自己紹介

錦林教会 明石義信



四月に錦林教会に赴任致しました。明石義信と申します。年齢は五十一才になります。福島県の会津若松市に生まれ、栃木県に育ち、同志社神学部に学びましたものの、三十九才まで福祉関係や一般の企業で勤めておりました。

牧師の経験がまだ十年ちよつとという者であります。京都教区に赴任させていただきまして、古い友人や慣れ親しんだ土地という懐かしさとともに、最初から始める地という思いも持っておりますので、少しずつ教区の

諸課題を学び教会の在り方に慣れていければと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。

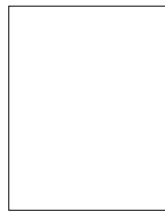
前任地は、九州教区の宮崎です。東国原知事で有名になっていますが、知事の元実家は、前任教会の五〇メートルほどの所という立地であり、教会員に知事のご親戚が居るという環境でしたが、それを知らずに知事就任に反対しましたら、えらい事になったという思い出があります。

赴任いたしました、地方と都会の格差と言いますか環境の違いを実感しております。単に人が多くどこの誰がどうしていると言うことがあまり気にならない環境だとも感じますが、個として生きていくことにおいては、選択肢の多さとともに孤立する確率の高さを感じずにはおれません。その中で地道に少しずつでも歩みを進めることが必要なのだと思います。顔を顔と顔を合わせて向き合える関係を持てる場が在る（付帯施設を含めて）事は、とても大切なことで、待っているだけでなく具体的な出会いの中で関わりを作り出していけるのだと感じております。錦林教会は教会の主体的な「わざ」として保育園をしております。

そのこのの意味を理解し、出会いの背後にある神の存在を感じ続けていきたいと願っております。小さな出会いの中に神が働かれる事を感じられなくては希望は持てないと思いをもち続けていきたいと願っております。

荒れ野の四十年

世光教会 榎本栄次



四十年ぶりに京都に帰ってきました。同志社を出て、札幌北光教会の伝道師（八年）を皮切りに、札幌北部教会の開拓伝道（十四年）、（十三年）、今治教会牧師（五年）と四十年、一休みしていたら母教会である世光教会から声がかかりました。

一九六七年、日本基督教団は、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」を公にしました。それまでの教会の姿勢を改め、「教会の体質改善」（宣教基礎理論）へと踏み出したものでした。これは単なる過去への反省ではなく、これからの教会が世の痛みと課題を共有し、それらに責任を持つという教会の本来あるべき姿への旅立ちでした。教会はここに立つべきだと確信し、牧師として出て行つたのです。

以来教団も私たちも「荒れ野の四十年」を経験することになりました。当時の日本社会は、七〇年安保、沖縄返還、ベトナム戦争、靖国神社問題、学園紛争などの嵐が吹き荒れておりました。北海道に赴任した私も、自分なりに真剣に取り組みました。

静かな魂の平安を求める人たちにとっては、こうした流れは雑音でしかなかったかも知れ

ません。取り組んでいる者たちにとっても、決して心地よいものではありません。多くの教会で、混乱や分裂が起き、とまどい慌てました。そこで祈り、聞き、取り組み、鍛えられたのです。いつの間にか次のような事が私の中で言葉となりました。

- ・ 信仰的であればあるほど社会的、科学的でなければならぬ。
- ・ 社会的、科学的であればあるほど信仰的でなければならぬ。

教会はこの世に対して責任がある。それは社会的で、科学的でなければなりません。そのため体質を改善は、なくてはならない試練です。同時に、「教会の体質改善」は、礼拝や祈禱会、献金などについて、消極的になるのではなく、よりしっかりと足を据えるべきものです。信仰的であることと社会的であること、この両者は、バランスよく五〇%ずつ分け合うというようなものではありません。どちらも一〇〇%でなければならぬのです。私たちの教団はその旅立ちをしたのだと思います。

信仰は旅立ちです。アブラハムは神の約束を信じてふるさとを出ました。またモーセに率いられてエジプトしたイスラエルは「荒野の四十年」を経験したのです。失敗と争いと混乱の連続でしたが、そこで神に出会ったのだと思います。

近年、日本基督教団はこの四十年を「荒野の四十年」として「戦争責任の告白」や「体質改善」などが間違っていたのだと、すべてを捨て去ろうとしているように思います。実

に悲しいことです。それは奴隷の国エジプトに戻る不信仰と言わねばなりません。私はこの四十年を決して思っていない。罪の旅立ちなどは決して思っていない。私たちの、罪や過ちにもかかわらず祝福と聖霊に満ちた日々であったと確信しています。ここにしっかりと立ち、反省することと評価することを整理しつつ、神の支配を待つ者でありたいと思うのです。

教会に遣わされて

東舞鶴教会 川崎一 路



私は、素朴な聖書主義の教会で育ちました。聖書さえ読んでいれば事は足りる……そのような考えでおりました。今、当手を振り返ると自分個人の思い込みと積んで自己満足的な信仰に耽っていたように思います。

しかし、ある出来事を通してそれまでの自分の信仰というものがバリバリと音を立てて砕け散っていくような経験をさせられました。自分の育てられた環境から離れざるをえなくなりしました。キリスト者であることさえも見失いそうになりながら、それでも闇夜を手探りするような思いの中でカルヴァンの著作と信仰にふれました。同じ頃、不思議なよう

に出会いがあたえられた、改革教会の流れにある方々からの手ほどきを受けながら、信仰というものは個人の思いによるものではなくて、聖書に基づくところの信仰告白と制度に則る公同の教会の信仰にアーメンというものであることがわかってきました。自分があれこれと思い煩っていたことへの導きは既に公同の教会の中にあたえられていました。キリスト者として考えるということは自分の小さな頭の中で問いを巡らすのではなく、公同の教会としての歴史という広大なフィールドに身を置き、キリストの体として黙想することでした。

その思いと行動の中で自分の召しへの捉え方もかえられていきました。牧師という働きは孤独な働きではなく、空間と時間を貫いて雲のように多くの証人たちに囲まれてある共同の牧会の業であることが身に染みてわかってきたのです。

主イエスのお考えがあつて舞鶴の地に遣わされました。私は家や仕事の関係でずいぶん引越しをしました。京都も舞鶴も全く接点がありませんでした。何も分からないと言っても良いのです。でも、それで良いとも思っています。必要なことは主が教えてくださるでしょうし、知らなくて良いことはそのままにしておかれるでしょう。地上での生涯は長いものではありません。あたえられた場所で、許された中で、今、できることをしていきたいと思います。

新たな出発の時を迎えて

京都葵教会 西岡裕芳

京都教区の皆様、こんにちは。私は西岡裕芳と申します。同志社大学神学部で大学院で学びを終え、牧会に出てから、十二年ぶりで京都へ帰ってきました。この間、四国の松山教会で四年、札幌の月寒教会で八年、それぞれ福音宣教の業に携わらせていただきました。

赴任して参りました京都葵教会は、神学生時代に信仰生活を送った教会です。教会の皆さんが当時から私の欠けを知っておりながら、牧師として迎えてくださいました。このことは本当に感謝なことです。今、私はかつてのことを思い返して懐かしさを感じながら、しかし同時に、ある意味で気楽であった立場が変えられて、負うこととなった責任の重さを感じながら、日々を過ごしています。

最近、ある方が「京都葵教会の人たちは、『生きていく』という感じがする」とおっしゃってくださいました。私なりに解釈すると、生きることに信仰することが無理なく自然に一つのこととなっていて、のびのびとしているのが私たちの教会の特徴であるということかもしれません。私は、この良い雰囲気を受け継ぎながら、同時に主によって新しくされて行きたいと願っています。教会にとっても、私自身にとっても新たな挑戦の時を迎えています。どうぞ、お祈りの内に覚えていただければ幸いです。

さて、実は、私はかつて京都教区の皆さん

に大変お世話になりました。その一つは、一年間、教区事務所の住み込みの管理人をさせていただいたことです。アルバイト料をもらいながら住まわせていただき、貧乏学生には大変ありがたいことでした。

もう一つは、ネパールワークキャンプに参加させていただいたことです。第一四回のワークキャンプに参加し、貴重な体験を得ることができました。しかも、帰国後、すぐに牧会に出ることが決まっていたので、報告などの責任を十分に果たすことができないことを承知で、ワークキャンプに送り出していたことは感謝の他ありません。

私は、現在の京都教区の様子や各教会の様子をまだ十分には理解していませんので、これから、いろいろと教えていただきたいと願っています。

そして、良いお交わりをいただきたく願っています。なお、家族は妻恵子と二人の息子、新(しん九歳)、弓(きゆう六歳)です。どうぞよろしくお願いいたします。

お邪魔します

日本クリスチャン・アカデミー関西セミナー
ハウス活動センター 春名康範

マンガ牧師の春名でございます。今年度から修学院にあります日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウスの仕事をさせていたいただいています。肩書きが長いので「アカデミー」というのがわたしには似合わない感じで戸惑っています。私には「垢で見い」の方がピッタリです。

セミナーハウスは、修学院離宮と曼珠院の間にあって、四季の景色がとっても美しいところです。読者のみなさま、修学院離宮にもクリスタン灯籠があることをご存知ですか？ セミナーハウスには茶室があって、利休さんはキリスト教の宣教師とも関わりがあったことをご存知ですか？ 修学院の山裾は、日本の文化に土着化してきたキリスト教信仰を見守る長い歴史を刻んできたのではないかと思っています。近頃、伝道が振るわないのだ、教勢が伸びないのだと、淋しくなる声がよく聞かれますが、もっと長い視野で伝道を考えましょう。また、土着化して人々の生活に染み込んでいる福音を再発見して、先人達の遺したものを学びましょう。

十一月二十三日(月・休)にはセミナーハ

ウスの恒例の「もみじ祭り」を致します。今年には、例年の出し物に加えて、安田美穂子さんのコンサートと私の「漫画展示」が企画されています。京のキリスト教の歴史の中に「漫画」が加わることになって緊張しています。ぜひ、「もみじ祭り」にお越しください、私のマンガも見てくださるようお願いいたします。

年が明けて三月一日(月)〜三日(水)には、全国から神学校の代表の神学生が集まって交流プログラムを持つ予定です。この集まりのために、教区議長様のご賛同を得て皆様から募金をさせていただきたいと考えています。諸教会で未来の宣教を担う神学生の交流を覚えて祈っていただき、サポートのお志を捧げていただきたく願っています。その節には、よろしく願います。

セミナーハウスを皆様の教会の修養会にご利用いただきたいと思います。お声をかけていただけますと、出来るだけのご便宜を図らせていただきますので、先ずはお電話ください。「春名は、いるか」と、〇七五七七一―二二一五番(セミナーハウス)へ。

就任にあたって

洛南教会 馬場詩織

牧会に復帰したのは七年ぶりです。これまで普通の企業(といっても派遣社員ですが)で週日働いてきました。

牧師を辞めたつもりでしたので、教会へはクリスマスとイースターを除いて行くことは

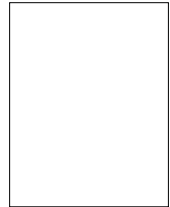
の気づきを得ました。

一つは、洛南教会での最初の礼拝出席した時のことです。自分がこれまでどれ程淋しかったかを強烈に知りました。教会との繋がりを断つたのは自分の意志でしたが、それは同時に自分の根となっていた部分をも切り捨てていたということに改めて気づかされました。戻って来ることのできた今、心の底から「幸せ」を感じています。

そしてもう一つは、教会を離れた七年間の学びから得た気づきです。私自身、学校を卒業してすぐに伝道師となった為、本当の意味での社会を経験したことがありませんでした。組織の一部として働きその利益によって生活するようになり、利益を生む為の行為は、時として良心のとがめを経験しなければならぬこともあるのを肉体的な感覚で知ったように思います。そして利益を生むということは、今の社会のシステム上、不利益を被る立場の人をも生み出します。

特に今のような不況下で会社が倒産したり、失業者を生み出したりしている世の中です。皆生き残ることに必死ですし、業務で責任を持つ立場上自分の手を汚さなければならぬ状況に追い込まれる人もいます。

ありませんでした。その状態から去年の十一月に洛南教会の礼拝に出席、今年のパステコステにおいて担任教師として就任いたしました。それに伴って二つ



もし私が、あのまま牧師を続けていたら、このような悩みを訴える人たちに何を言っただろう、と最近よく考えます。きっと「そんな働き方間違っている」とか「もっと世の中の人の為になるような仕事をしたら」などと言っていたのではないかと思います。

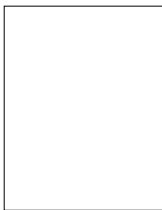
しかし、こういった苦しみは個人というより、社会の苦しみと言えます。社会そのものを伴って皆教会へ来ているのだ、という認識を持つことはとても大事なことでと判りました。従って、自分の為だけに教会に行くのではなく、それぞれが社会の為に教会に集まっているということもできると思うのです。社会に育てられる私たちですが、逆に社会を育てる役割を皆持っているのだと気づくことは大事なことだと思います。

この二つの気づきが、今後私が牧会していくに当たっての重要な要素となることでしょう。皆さん、どうぞよろしく願います。

一日の重み〜就任にあたって

平安教会 渡辺誉一

この四月より平安教会に着任しました。同志社を卒業後、東京赤坂の靈南坂教会、アメリカはサンフランシスコ・ベイエリアにあるシカモア組合教会、神



奈川県は鎌倉市にある大船教会を経て京都へ戻ってまいりました。なぜか観光地ばかりを回っておりませんが、観光気分ではなく、しっかりと地に足を付けた歩みと願っています。

私はよく他教会の牧師就任式で「天地人という言葉で教会的に表現すると、その地を愛し、その地に住む人々を愛して、はじめて天は開かれるのです。どうかこの地を愛し、ここに住む方々を愛して下さい」と語ってきました。今回、自分で語った言葉が自分自身に返って来ることに、本当に襟を正される思いです。

平安教会は今年の十二月に創立一三三年を数える歴史と伝統のある教会です。ですから私は「慌てずにゆっくりと、じっくり」と構えていました。ところが、ある九十五才になられるご高齢のNさんという方から「私は百才までがんばります。百以後は神様にお任せです」と言われました。体調がすぐれないと伺い、教会員の方と一緒に訪ねをした際の一言でした。

「百才までがんばる」と私の手を握るNさんの手に、私は何を握り返せるのだろうか、とても複雑になりました。一日一日の重みは、今の私とはまるで違うこと。移りゆく季節の風景は、Nさんの心に一体どのように写っているのだろうか、私はいつの間にか「歴史と伝統」という言葉が持つバイアスに飲まれながら、自分に都合の良い様に受け止めていたのでしょう。

地を愛し、人を愛するのは「今ここから」であり、「ゆっくり、じっくり」と自分の都合

で先延ばしには出来ないものであることを、Nさんから戒められました。慌てずにしかし、今出来る小さなことを一つ一つ心を込めて取り組んでいきたいと思わずにはいられません。そして、一日の重みに思いを馳せることが、真に歴史に生きるといふことなのでしょう。

現代美術史家のアビ・ワールブルクの言葉に「神は細部に宿り給う」があります。大切なものは、一日という日常の一コマ、その細部にひっそりと息づいているのでしょうか。平安教会で、また教区の様々な取り組みの中で、大切な息吹を感じ取ることが出来たのなら幸いです。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

新企画【教会・伝道所からの声】(1)

教会生活の喜怒哀楽〜子どもの教会

大津教会 あすま 東 昌 しやう 吾 ご

私が教会に行き始めたのは、私が小学校に入った頃から、母が教会に行き始めたことがきっかけでした。その後、その教会の教会学校に通うようになったのですが、中学生になった頃からあまり教会に行かなくなりました。

しかし、教会に行かない中で少しずつですが、信仰を持つようになっていきました。高校に入ってから部活動の関係もあり、毎週ではなかったのですが、たまに教会に行くようになり、そして高校三年生から部活動を引退したことを機に、出来る限り毎週教会に行くようになり、その夏に洗礼を受けました。

自分でなぜ信仰を持つようになったか、教会に行くようになったかを振り返ってみると、小学校の時の教会学校が大きな原因となっているように思えます。

私は今年の四月から大津教会に行くことになり、七月に大津教会に転会をしたのですが、大津教会に転会をした今、子どもの教会で奉仕することになり、そのことをとてもうれしく思っています。以前行っていた教会では、教会学校のスタッフをしていなかったのですが、初めは緊張していましたが、子どもの教会のスタッフの方々にあたたかく迎えていただき、すぐになじむことが出来ました。また、分級の手伝いだけでなく、子どもの礼拝での司会もさせていただき、慣れないながらも少しずつ子ども教会での働きをさせていただいています。加えて、ハイキングや夏のキャンプなどの行事にも参加させていただき、とても楽しい時間を過ごすことができました。それらの行事では、普段子どもの教会に来ていない子どもも参加し、子ども同士や、子どもとスタッフの交わりがより深くなった事を感じています。そのように子ども教会でスタッフをしていると、ふと自分が教会学校に通っていた事を思い出し、懐かしく思います。そして何より、今は子どもたちと接する事がとても面白く、楽しみでもあります。子どもたちの楽しそうな様子を見ると、自分まで楽しくなってきました。そして、子どもの教会の中で、子どもと接する時どのような事を見つければよいかということなども、他のスタッフから学ぶ事もありますし、子どもから教えられる

こともあります。

私は子どもの教会に参加し、子どもが大切な存在であるという思いが強くなり、また子どもから学ぶ事も多くあるという事を感じています。そして今私は、喜びと楽しみの中で、子どもの教会にスタッフとして関わる事が出来たことを感謝しています。

最後に、今年度から京都教区事務所の管理人を任されたこと、皆様に報告いたします。精一杯ご奉仕いたしますので、よろしくお願いたします。感謝いたします。

私と教会

大津東教会 高谷 裕紀子

私は、幼少から学生時代、どっぶりと大阪府枚方市にある日本基督教団香里教会で育ちました。特に中学高校時代は、毎週日曜日礼拝後も仲間達と、聖書を読み、折り合い、賛美をし：朝から夕方まで一日中教会で過ごしていました。心身ともに神様の愛を感じ、神様への感謝の思いで満たされ、新たな一週間が始まる。そういった生活でした。

ところが、大学を卒業して社会人になると、仕事中心の生活になり、また、家族と離れ、東京という初めての土地、自分自身の生活の場も一気に拡がり、いつの間にか、日曜日教会という生活から離れてしまいました。社会に出て、色々な考えの人がいることを肌で感じ、どのように折り合いをつけていけばいいのか。今まで自分のことを理解してくれ

ている人達の中で温々と生きてきたことを痛感し、神様に祈りつつも、しかし、「相手を理解し、受け容れる」ではなく、ある意味、「割り切る」ようになってしまった自分がいました。「色々な考えの人がいて、いい」「自分は自分、相手は相手」と。相手のことを尊重しているようで、自分が傷つかないように、悩まなくていいように適度な距離をとる。そんな術をいつの間にか身に付けていたように思います。それでも心が飢え乾いて、求めるように教会に足を運んだときは、「神様はこのように私でも、全て丸ごと受け容れて下さっている」と賛美歌を歌いながら涙が出て仕方ありませんでした。

結婚後、新しい職場での仕事と勉強の毎日、全てが刺激的で寝る間も惜しんで打ち込む自分に、満足感、充実感を抱き、しかし仕事中心の生活では得られないこと、失うものも多く、「忙」の字の通り、心を亡くした状態になっていきました。夫婦、家族のこれからの考え、仕事を辞め、大津市に移ったのは結婚五年目、大津東教会に初めて来たとき、礼拝中に窓から差し込むやわらかい日差し、眩しいくらいの新緑、そこに牧師先生のメッセージがスーッと私の心、身体のすみずみまで浸みわたり、潤い、神様への感謝の思いで一杯になり、涙があふれてきたことを今でもはっきり覚えています。「戻るべき場所はここだ」と大津東教会に転会し、間もなく十年になります。教会にどっぶりつかっていた十年、離れた十年、そして、また教会につながる事ができた十年。私が離れていたときも神様は

ずっと見守り、忍耐強く導いて下さったことへの感謝の思いで一杯です。今は、自分が教会学校で育ったことを思い出しながら、二人の子どもと日曜日は教会学校からスタートです。これからも教会に繋がる枝として、神様から離れず歩んで行きたいと思っています。

「教会のセクシユアル・ハラスメント —その克服のために」を読んで

膳所教会 菫川 俊一

このパンフレット(No.1、二〇〇九年五月)一頁の中央に、「教会でセクシユアル・ハラスメントが起こっているなどあり得ない!という反発もあるかも知れませんが」とあります。それにも拘わらず、筆者は人間社会が存在する限りあり得るのだという前提に立ち、パンフレットの「自分たちの課題として受けとめ、いっしょに取り組んで行く」という趣旨に賛同しつつ、以下に読後感を記します。

セクシユアル・ハラスメント問題小委員会が設置(二〇〇一年)されたキツカケは、二〇〇一年四月の損害賠償を求める提訴により明らかとなった、熊本の教会の牧師によるセクシユアル・ハラスメントでした。この民事裁判は、既に二審で損害賠償が確定しましたが、この牧師は現在も、熊本の教会で現役として健在だそうです。本件については、以上のほかには何らの情報も持ち合わせていません。かといって、本件を静観したまま一件落着かせてしまうことには、ある種の違和感が

残ります。これを少しでも軽減するため、次の二点を筆者なりに考えてみたいと感じました。第一は、現役を継続できるのは何故かであり、第二は、原告に対して謝罪がなされたか否かです。

第一に、確定判決を知らながら現役の継続を認めることは、最終判断を裁判所に委ね、日本基督教団は独自の判断を加えないことを意味しましょう。このことについては、教会の内外を問わず、意見の分かれることだろうと思われます。

第二に、筆者にとって、事実不明です。もし謝罪されていたのなら、原告の満足度はどうだったのでしょうか。このケースは考えたくありませんが、もし謝罪されていなかったならば、どのように対応すべきでしょうか。原告に対するPTSD対策など、なすべきことが残っているようです。

★★★★★★★★★★★★

【京都教区 各部委員名簿 追加】

〈不登校・ひきこもりの青少年や

家族とともに歩む特設委員会〉

倉橋 剛、廣畑涙嘉、横田明典、明石義信、
片岡広明、山下茂雄

【報告】

両丹地区・滋賀地区の

教会を訪問して

長岡京教会

韓^{はん}

守^す

信^{しん}

さきの八月十日（月）と十一日（火）の両日、望月修治議長と井上勇一副議長とともに、両丹地区・滋賀地区教会訪問いたしました。初日は、丹陽教会、福知山教会、北丹峰山教会、大江野の花教会、物部教会を訪ねました。二日目は、朝日教会、甲西伝道所、能登川教会、近江野田教会を訪ねました。

教区総会などの公的な集いよりもっと親密かつ真摯な話し合いができました。それぞれの教会・伝道所が抱えておられる課題に耳を傾け、心をひとつにして祈りを合やすことができました。わたしにとって、ホントに初めての体験でした。あつという間の二日間でした。

教区の繋がりを与えてくださった神さまに、少しでも応えていく働きをなしていきたいと願っています。

【お知らせ】

「障がい者とともにある主日」

を守るために

日本キリスト教団では、十一月第二主日（今年八月八日）を「障がい者とともにある主日」とし同週土曜日（今年八月十四日）までを「障がい者週間」と定め、各教会で障がい者とともに生きる社会が実現するために心を合わせるよう求めています。「国連・障害者年」行動計画以後、スロープやエレベーターの設置などバリアフリー面の整備は進んできていますが、人間らしく生きていける状況には程遠く、「障害者自立支援法」が二〇〇六年に施行されてから、それまでほとんど無料だった通所

施設の利用料が原則一割負担増になり生活が苦しくなるなど、障がい者の社会的自立はむしろますます厳しいものになってきています。これらの現状と当事者の思いを届け、この問題についての理解を深めるため教区障がい者問題特設委員会では、各教会へ講師の紹介・派遣を行っています。この日以外にも対応いたしますのでご連絡ください。問い合わせは教区センターまで。

編集後記

朝夕が涼しい季節となりました。京都教区の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。いつも教区の働きをお支えくださり、心より感謝を申し上げます。とりわけ、お忙しいなかご寄稿いただきました皆さまには、深く御礼申し上げます。今回からは、二つ目の新企画「教会・伝道所からの声」が始まりました。この企画をつうじて、京都教区に連なるお一人おひとりの思いや課題などを分かち合い、主イエスのひとつの体として歩んでいく感謝と喜びをともに実感できたらと願っております。これからも、さらに楽しくて素敵な『教区ニュース』を目指して、精一杯、ご奉仕させていただきます。皆さまの理解とご協力、何よりもお祈りをよろしくお願い申し上げます。豊かな実りの秋をお迎えください。イエスは主なり&シヤローム！

(H)